

## 【論考】

# フェリックス・ガタリにおけるイエルムスレウ言語理論の理由と展開

山森 裕毅 (滴塾 第二学舎)

### はじめに

哲学者ジル・ドゥルーズと精神分析家フェリックス・ガタリは共著である『千のプラトー』のなかで言語学者レイ・イエルムスレウを「スピノザ主義地質学者」<sup>(1)</sup>と評した。ドゥルーズがスピノザの哲学を高く評価し、自身の思想形成への強い影響を隠さなかったため、それと連動する形でドゥルーズ研究の文脈でイエルムスレウへの関心や評価も高まった。ドゥルーズの難解な思想をより深く理解するうえでイエルムスレウは重要な思想家のひとりである。

はたしてこの認識は正しいだろうか。あるいは正しいとして、それでも『千のプラトー』におけるイエルムスレウ論はドゥルーズの名において汲み尽くせるものだろうか。というのも、共著者のガタリもまた自身の思想形成にイエルムスレウの言語理論を必要としていたからである。文献上の事実としては、イエルムスレウへの言及はガタリのほうが圧倒的に多い。また証明は難しいが、最初にイエルムスレウとスピノザのあいだに思想上の共通点を見出したのはドゥルーズではなくガタリだった可能性もある<sup>(2)</sup>。それほどまでにガタリにはイエルムスレウを必要とする思想上の理由があり、その展開がある。

その発端はラカンの精神分析への批判をめぐるものである。この批判はやがて「ダイアグラム」を軸とするガタリ独自の記号論の構築へと進展していくのだが、イエルムスレウの言語理論はその一連の議論の基盤をなすものとなる。では、その一連の議論とは具体的にどのようなものだろうか。本稿は主に『アンチ・オイディプス草稿』(以下『草稿』と略記)と『分子革命』の二冊を通して、ガタリのイエルムスレウ論の理路とその展開を相当に簡略化して辿るものである<sup>(3)</sup>。この理路を端的にまとめれば「シニフィアン発—地層經由—ダイアグラム行き」と表すことができる。ただし注意が必要なのは、この行程は時系列的なものではなく、理論的かつ実践的な順序だということである。

### 1. シニフィアン発、あるいは争点としての「記号」

ガタリは 1950 年代からラカンのセミナーールに出席しており、

62 年に彼から教育分析を受けはじめて 60 年代の後半(69 年か?)に精神分析家になったという経緯がある。そしてその過程のなかでラカン派精神分析への理論的な批判を抱くようになっていった。

その批判が明確に形にされたのが 1972 年の『アンチ・オイディプス』(ドゥルーズとの共著)である。このなかでイエルムスレウの言語理論が短く参照されるのだが、それはラカン派精神分析にとって基本的な概念であるシニフィアンとシニフィエを、イエルムスレウの提案した概念「表現」と「内容」によって乗り越えることができると説く場面である。この議論についての理論的な説明は後回しにして、まずここで確認しておくべきことは、ガタリが対精神分析戦略として言語を含めた「記号」を争点に選んだということである。

この争点が最初に現れるのは 66 年の論稿「記号から記号へ」である。これはガタリが 61 年にラカンに宛てて直接手紙で伝えたものを再構成したものとされる。インクの染みについての記述からはじまり、点のような記号がどのようにしてシニフィアンになるのかについて論じている。しかし難解な部分が多くなり、その論旨を精確に読み取ることはできない。このことから、この時期ガタリはまだ自分の考えを表明するための言葉を持っていなかったと考えられる。その後、彼は『草稿』でこの論稿について振り返っているのだが、そこで登場するのがイエルムスレウである。

どうということかといえば、染みや点を用いてガタリが論じたかったのは、まさにイエルムスレウのいう「記号素=形象」(figur, figure)のことだったというのである(記号素=形象とは「記号の構成部分として記号体系のなかに入る(…)非記号」<sup>(4)</sup>)であり、ガタリはこれを「シニフィエの外部にある(…)下-意味的[infrasens]な素材」<sup>(5)</sup>のことと理解する。ちなみにイエルムスレウが「記号」という場合、おおよそ「言語」のことを指しているが、ガタリはこれを言語に限定されない記号にまで拡張して使いたいと考えている)。こうしてガタリはイエルムスレウの言語理論と結びついていくことになる。

## 2. イェルムスレウの理由：『草稿』

### 2-1. ガタリ的前提

『草稿』が2005年に公開されたことによって、精神分析と記号論の関連について非常に多くの、しかし錯綜した記述を読むことができるようになった。『アンチ・オイディプス』での言及の短さは何だったのかと思うほど、イェルムスレウの名は『草稿』のなかで繰り返し登場する。では、それは何のために／どのような仕方だろうか。

すでに述べたようにそれはラカン（派）の精神分析を批判するためであるが、ここではもう少し深く踏み込んでみよう。ガタリは精神分析のトレーニングや精神を病んだ（特にスキゾフレニーの）人々との交流を通して次のような理解に至った。「無意識は〈言語のように構造化されて〉はいない」<sup>(6)</sup>。これはラカンの有名なテーゼのひとつ「無意識は言語のように構造化されている」を真っ向から否定するものであるが、ガタリは自身の考えを展開するための理論的な道具をイェルムスレウの言語理論に求めたのである。

後者の無意識をここでは「言語としての無意識」と呼ぼう。この無意識に対するガタリの論点を三つにまとめることができる。ひとつは意味作用(signification)をめぐるものである。ガタリにとっての意味作用とは、記号の表示面であるシニフィアンと記号の内容面であるシニフィエが一対一対応することでその効果として「意味」を生じさせる作用ということができる。とりわけガタリはシニフィアンに優位性があると考え、その対応関係をシニフィアンがシニフィエを従属させる関係と見なす（ガタリが「シニフィアンの専制」や「シニフィアンの帝国主義」と呼ぶ事象）。

二つ目は象徴をめぐるものである。象徴とはシニフィアンとシニフィエの対応関係が類似でも因果でもなく、人為的なものであるような記号のことであり、だからこそシニフィアンがどのようなシニフィエに結びついているのかを「解釈」する契機が生まれる。精神分析ではこの解釈の作業においてオイディプス神話を基にした解釈格子を用いるが、ガタリはこれを還元主義的で無意識の分析には適さないものとして、また罪責性を背負う個人を生み出す操作として批判する（個人を生み出すとは、ガタリにとっては資本主義の末端で隷属させられる近代的主体を生み出すことをも意味し、そのため精神分析は資本主義の装置として捉えられることになる）。

三つめは主体をめぐるものである。ラカン派精神分析の場合「無意識の主体」というものが重視されるが、ガタリがこだわるのはそれではなく「言表行為の主体」である。ガタリは言表行為の主体なるものは存在せず、言表行為の集合的なエージェント（代行者）がいるのだと主張する。そして後者はガタリの主要概

念である「言表行為の集合的アジャンスマン」へと展開していく。

ガタリは、言語としての無意識を構成する上記の特徴（意味作用、象徴とその解釈、言表行為の主体）が人を社会に従属させるように機能すると考える<sup>(7)</sup>。ガタリがイェルムスレウを必要とする理由は、まさに彼の言語理論が言語としての無意識を批判するポテンシャルを秘めていると考えるからである。

しかし一見すると奇妙なことである。ラカンの精神分析はフロイトやハイデガーの言語観とソシュールやヤコブソンの構造主義言語学とが混じり合って作られているが、イェルムスレウはそのソシュールの最大の後継者と評される言語学者である。とすれば、ソシュールの延長線上にイェルムスレウはいるのであって、むしろ精神分析を批判するよりも強化するほうに適しているのではないか。これに対するガタリの基本的な考え方が『分子革命』に所収の論稿に示されている。「私が思うに、言語学者たちはイェルムスレウによる表現と内容のあいだの区別と、ソシュールによるシニフィアンとシニフィエのあいだの区別とを性急に同一視したのである。」<sup>(8)</sup>。

では、実際にガタリはイェルムスレウの言語理論の何を／どのように使って言語としての無意識を批判していくのだろうか。この点について『草稿』から掘り下げてみよう。

### 2-2. 形象

ガタリが『草稿』のなかで扱うイェルムスレウの概念でまず取り上げたいのは「記号素＝形象」である。これは先にも触れた通り記号の素になる非記号（素材）を意味する概念だが、ガタリはこれを「その素材が形象である記号」<sup>(9)</sup>と独自に捉え「形象-記号」と表記する。彼はこれに「（無意味とは異なる）非-意味であり（…）意味作用の外部で作動する」<sup>(10)</sup>という機能を認める。これはシニフィアンに還元することのできない機能である<sup>(11)</sup>。

ところがガタリは、せつかく切り分けた形象-記号とシニフィアンを同列に並べて論じたり、形象-記号に個人化（対象の身体化や実体化など）の機能を認めたりするなど、その理解には揺らぎがあるように見える。これをどう考えればよいのか。次の引用から考えるなら、ガタリは形象-記号をシニフィアンでもありシニフィアンを逃れるものでもあるという両面性を備えたものとして捉えていたと考えることができるだろう。

だから形象-記号を悪いものだとして早急に判断しないことだ。もしそれがシニフィアンのエージェントだとしても（…）、それは革命的な道もまた開くのである、生産的な無-意味の分裂-倒錯的な道。<sup>(12)</sup>

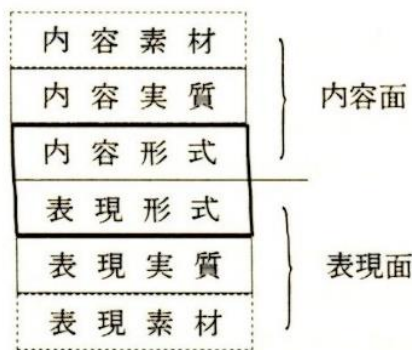
形象の議論はいったんここまでにして、イェルムスレウの別の概念に移ろう。それは「表現」と「内容」、次いで「形式」と「実質」と「素材」といった概念群である。これら概念群によって記号の「地層」というひとつのヴィジョンが描かれる。

### 2-3. 表現と内容、形式と実質、地層

順を追って見ていこう。まず「表現」と「内容」とは、記号の表現面と内容面を表すものである。これらが言語学者らによってシニフィアンとシニフィエにそのまま重ねられるのはわからないことではないし、実際イェルムスレウも言語学者としてある程度そう考えていたと思われる。これに対してガタリは次の差異を重視する。ひとつは、シニフィアンがシニフィエを従属させる関係であるのに対して、表現と内容の場合は相互依存関係（連帯関係）であるということ。ここでいう相互依存とは、表現が内容の表現であり、内容が表現の内容であるというような、双方が他方を前提しなければ成立しない関係のことである。ガタリはここにシニフィアンの専制の解消を見出そうとしているように思われる。

次にガタリは、イェルムスレウのいう表現には音韻や音声、文字など言語にかかわるものだけでなく、身振りや形象、アイコン、ダイアグラムなどの非言語的な表現も含められると考える（アイコンとダイアグラムはガタリが参照するもう一人の重要人物チャールズ・サンダース・パーズに由来する概念）。しかし、精神分析がシニフィアンに非言語的な象徴も含むことを考えれば、表現に非言語的なものを含むというだけではシニフィアン批判にはならない。とすればおそらくこういうことだろう。精神分析のシニフィアンが言語優位で、非言語的なものもやがて言語に還元される傾向が強いのにに対して、ガタリの考える表現は非言語的表現に重きが置かれている。それは究極的にはダイアグラムに向かうのであり、それによって無意識は言語としての無意識を超えて「ダイアグラムの無意識」に至るとというのがガタリの主張である。

続いて「形式」、「実質」、「素材」について触れておこう。これらは表現と内容を分析することで析出される記号機能の区分であり、表現の形式／表現の実質／表現の素材、そして内容の形式／内容の実質／内容の素材となる。『記号学小辞典』での図<sup>(13)</sup>を参照すれば次のようになり、これを「地層」と形容する。



イェルムスレウによれば「素材」は、内容の場合は無定形な思考の塊を意味し、表現の場合は無定形な音声領域の連続体を意味する。どちらにせよ未分化な連続体のことであり、「原意」(mening)と呼ばれることもある。「形式」とは体系的に形成された分節であり、これが素材を切り分ける。そして形式によって切り分けられた素材が「実質」に当たる。

『草稿』においてガタリの素材への関心はそれほど強くなく（素材と実質を混同するかのよう）に実質を純粋な連続体（物質流）と見なし、また形式を「コード」と読み替えて議論を進める。そしてイェルムスレウが実質を軽視し、形式を重んじたこと<sup>(14)</sup>を高く評価して、ガタリ自身のコード論を補強するために彼の言語理論を用いていく。説明が複雑になるためここでは深く踏み込まないが、このコード論が「コードの剰余価値」や「コード拡張」、「共立平面」といった議論とともにダイアグラム論へとつながっていくことになる（雀蜂と蘭の婚姻の例<sup>(15)</sup>）。この先の議論と関連してここで注目しておくべきことは、この時点でガタリはダイアグラムをコード、つまり形式の枠内で捉えていたということである。

以上、『草稿』からかなり手荒く圧縮してガタリの議論を追ってきたが、この時期にすでに「シニフィアン発—地層經由—ダイアグラム行き」の理論的-実践的順序が出来上がっていることがわかる。イェルムスレウの言語理論はこの順序のなかでシニフィアンからダイアグラムへの移行をつなぐ重要な役割を果たしているといえるだろう。

## 3. イェルムスレウの展開：『分子革命』

### 3-1. 権力と恣意性

『草稿』にはガタリのイェルムスレウ論のほとんどのアイデアが出揃っていたといえる。それは爆発的といえるほどの勢いと量である。しかし、決して体系的な完成度が高かったわけではなく、萌芽状態だったものも多い。そして時を経るなかで整理が進み、評価が変わったものや消えていったもの、そして練り上げられていったものもある。1977年に公刊された『分子革命』はそのようなガタリの試行錯誤が非常によくわかる論集であり、イェルム

スレウへの言及も多い。ここからは『草稿』以後のイェルムスレウ論の展開を『分子革命』から辿ってみよう。

『分子革命』において明確に前景に出てくる議論のひとつは「権力」と「政治」である。これらは『草稿』においてはまだうまく記号論と接合しきれていなかったが、『アンチ・オイディプス』を経て『分子革命』に至るなかではっきりと接合されることになる。では記号と権力はどのように関連するのか。ガタリを考えを三つ列挙しておこう。

権力は意味作用の記号学 [sémiologies de la signification] にもたれかかることでしか自身を維持できない。つまり「いかなる者も法を知らないとは見なされない」というが、これはいかなる者も語の意味を知らないとは見なされないということ的前提としているのである。<sup>(16)</sup>

意味は、(…) まぎれもなく実在し正確に特定できる社会的権力構成体 [formations de pouvoir social] によって調整されている。(…) 意味作用を捉えることは常に権力を握ることと不可分である。<sup>(17)</sup>

ある欲望にかんして「それは何を意味しているのか」という問いが出されるたびに、ごまかされてはならないことがある。つまり、ひとつの権力構成体が介入しつつあって、説明を求めに来ているのである。<sup>(18)</sup>

これらの引用からわかるのは、権力と意味作用とが連動しており、権力構成体は意味を司ることができる、ということである。こうした考えが「言語としての無意識」にも絡んでくることになる。ガタリがこう述べている。

「無意識は言語のように構造化されている」とラカンは私たちにいう。もちろんそうだ！しかし、誰によってそうなのか。家族によって、学校によって、兵舎によって、工場によって、映画によって、そして特殊な事例においては精神医学や精神分析によってである。<sup>(19)</sup>

無意識はその本性として言語のように構造化されているのではなく、権力構成体（家族、学校、精神分析など）との関係においてそうなるというのがガタリを考えである。このような議論を通して彼はイェルムスレウ論の展開において重要な見解に至る。

意味を生じさせる結合の操作の恣意性は、言語学者たちがシ

ニフィアンとシニフィエと呼ぶもののあいだに彼らが描き出すものなのだが、実際のところ政治的な恣意性である。<sup>(20)</sup>

シニフィアンとシニフィエの結合の恣意性に政治や権力構成体の介入を見出すのはガタリ独自の見解といえる。そしてまさにここが闘争＝逃走の場所となる。それだけでなく、シニフィアン-シニフィエが権力の介入する地点だとして、では表現-内容の連帯関係についてはどうなのかも問わなければならない。はたして表現-内容は政治や権力とどのようにかかわるのだろうか。

### 3-2. 形象から非シニフィアンの記号論へ

「形象」から見ていこう。というのも『草稿』においては形象がシニフィアンに属しつつも、意味作用を逃れて別の仕方で作動するものとして描かれていたからである。『分子革命』ではどうだろうか。ここでは形象はどちらかといえばネガティブな側面で見られることが増え、また短く言及されるのみで議論が深められるということはない。端的にいえば存在感を失って後景に退いたといえる。

それに代わるように前景に出てくるのが「非シニフィアンの記号論」(sémiotiques a-signifiantes) というものである。これを厳密に捉えるのは難しいが、形象が記号 (=シニフィアン) の素になる非記号であり下-意味的な素材であると規定されていたのに対して、非シニフィアンの記号論は記号 (=シニフィアン) の素にはならない非記号であり、無意味な(意味作用から外れた)素材、しかし科学的あるいは芸術(特に音楽)的に形成された素材であると規定される。いわば形象よりもさらに意味作用から距離を取った記号論、もっというと意味作用から「世界を逃がす」<sup>(21)</sup> 記号論をガタリは構想していくのである。

非シニフィアンの記号論はガタリの記号論において核心をなすものであるが、本稿の性質上この概念にこれ以上深く踏み込むことはしない。ここではこの記号論がイェルムスレウの言語理論とどう関連するかを追う。すると見えてくるのは『草稿』では焦点の当たることの少なかった「素材」という概念であり、さらにいえば「表現の素材」という概念である。

### 3-3. 素材と映画

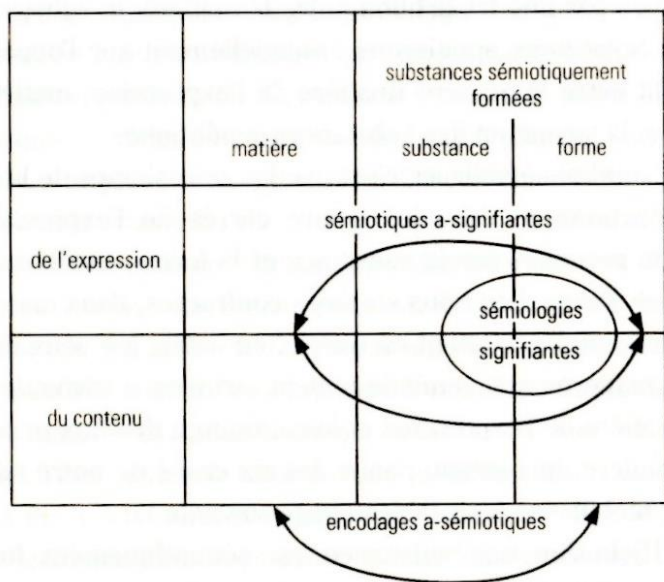
素材とは何か。すでに触れたように、それは(内容であれ表現であれ)記号の形式がそこから実質を切り出してくるところのものである<sup>(22)</sup>。イェルムスレウ自身は言語学が扱うのは主に表現の形式と内容の形式であるとして、素材そのものに対してそれほど関心を向けていないように思われる。それを受けてか、ガタリ自身も『草稿』では素材についての言及がないわけではないもの

の、形式 (=スピノザの「様態」 =コード) の創造性に重点を置いた考察を多く残していた。

しかし、非シニフィアンの記号論という考えが前景化してくると連動して素材についての言及が増えてくる。このことについてガタリは簡潔に次のように述べている。

実際、記号的に形成されていない素材と記号的に形成された実質との区別は、その区別が表現と内容の関係から独立して設けられるかぎり、シニフィアンの記号学(sémiologies)から独立した記号論(sémiotiques)、すなわちまさにシニフィアン-シニフィエという二極性のうえに築かれるのではない記号論の研究への道を開くのである。(23)

つまり、形式 (および実質) の観点に留まるかぎり意味作用の記号学の枠内から出ることができないとガタリは考え、その脱出路として素材に着目したと考えられる。ガタリはこの考えをイエラムスレウの地層を用いて次のように表している (24)。



この表によってシニフィアン (意味作用) の記号学と非シニフィアンの記号論の関係性を捉えることができるようになる。要するに前者が権力構成体が意味を司る領域を表しており、後者が権力構成体が意味を司る領域の外部を表しているといえる。するとここまでの議論から、ガタリは素材を (意味作用から世界を逃がす橋渡的な機能を担うもの) として捉えていると考えてよいだろう。ここで、イエラムスレウではなくガタリにとっての素材についてもう少し踏み込んでおこう。

ガタリの素材論が比較的わかりやすく論じられているのは『分子革命』に収められている彼の映画論である。このなかでもガタリは、映画の意味作用として機能する側面とそれを逃れる非シニフィアンの記号論の側面を対比的に論じている。そこで内容の素

材と表現の素材の関係について、映画記号学者クリスチャン・メッツを参照しつつ次のように述べている。

非シニフィアンの記号論としての映画は、どうやってシニフィアンの記号学の枠を越え出のだろうか。クリスチャン・メッツは私がやるよりもうまくそれを説明している。彼が教えてくれるのは、映画は分野が限定されて専門化した言語ではなくて、その内容の素材には限定がないということである。(…) 映画の内容の素材は、その表現の素材を構成する記号論的混合物がそれ自体で外部の多種多様な強度のシステムに開かれているだけに、いっそう伝統的なコード化をはみ出していくのである。(25)

引用からうかがえるのは、ガタリが表現の素材を (内容の素材を牽引するもの) として捉えているということである。つまりガタリのなかに表現の素材の重視がある。実際、彼の論稿のなかで内容の素材という概念が出てくることはあまりない。それは内容の素材がイエラムスレウにとっては無定形な思考の塊であり、ガタリにとっては「物質流の連続体」(26) であるという理解のズレから来る扱いにくさによるものかもしれない。あるいは表現の素材が知覚的・感覚的なものであることから来る実践上の捉えやすさによるものかもしれない (27)。何にせよガタリは、その内容よりも表現の素材が過剰になるときに映画はシニフィアンの網の目をかいくぐっていきと考えるのである。

### 3-4. 強度、地層、そしてダイアグラムへ

表現の素材についてもう一点だけ触れておこう。この表現の素材にガタリは「強度」という重要な特徴を与えている。これは十中八九ドゥルーズ由来の概念であり、時空間に現れ出る以前の存在の度合いとして感性の対象となるものを表す概念である。ドゥルーズにとってもガタリにとっても最重要概念のひとつである「強度」を表現の素材に結びつけていることに、表現の素材という概念の重要性がうかがえる。では表現の素材と強度はどのような関係かといえば、表現の素材が強度とつながりを持っており、そのうえで強度を担い、強度を伝達するといった関係である。

ガタリのイエラムスレウ論を考えるうえでこの「強度」という概念はひとつの指標となる。というのも、ガタリにとってイエラムスレウの言語理論は強度を積極的に肯定できない理論として映るからである。

シニフィアンの記号論[sémiotiques]は、強度の多様体を表象し、無効化し、無力なものにして、それが形式-実質のカツ

ブルに依存するように仕向ける媒介システムを打ち立てる。

(…)シニフィアンの記号論は強度の素材に二重分節の地層の体制を課すのである。(…) イェルムスレウによって描かれる記号論的な地層にしても、このシニフィアンの記号論の地層が属している形式化の独自の様式にまだ属している。<sup>(28)</sup>

この「地層」という議論がイェルムスレウをある限界点に留まらせる。というのも、ガタリはその限界点を越えたところにダイアグラム論を設定するからである。どういうことかといえば、ガタリにとってダイアグラムが機能するのは究極的には表現と内容の区別が消失したところだからである<sup>(29)</sup>。だから地層のなかで記号の機能を捉え続けるかぎりには、表現と内容の区別が消える一線を踏み越えることができない。できるのは表現の素材によってその一線に極限まで近づくことだけである。

補足しておくとして『草稿』では形式の位置にあったダイアグラムは『分子革命』では素材へと位置を変えている。また表現／内容の区別が消失することは形式／実質／素材が消失することとは別のことである。ガタリは前者の区別の消失後も後者の区別は有効であると考えている。ガタリが表現の素材にこだわるのは、それが人間の扱えるものだからである。そして、たとえイェルムスレウの言語理論がこの一線を越えられないとしても、人間は表現の素材を通してダイアグラムのほうへと実践的に越える(脱地層化する)ことができるというのがガタリの考えであり、この考えが『機械状無意識』や『千のプラトー』に引き継がれ、深められ

ていくことになる。

## 結び

ここまで『草稿』と『分子革命』を通して70年代のガタリの思考を簡略に辿ってきた。以上から、ガタリにとってイェルムスレウの言語理論とは何だったかといえば、ラカン(派)の精神分析への批判という闘争的な論点を提供しながらもダイアグラムへの最後の一線を踏み越えられない理論となるだろう。しかし、一線は越えられないにしても、そこに線があること、そしてその向こう側があることを示すことに成功した理論ともいえる。表現と内容の区別がなければ、その区別の消失という事態を捉えることもできないからである。

つまり、ガタリの記号論におけるイェルムスレウの言語理論の価値は、本稿で取り上げた概念群が描くヴィジョンの有効性(実用性)にあるといえる。ガタリにシニフィアンからダイアグラムへの移行という難解な理路を描くことを可能にしたのは、まさしくイェルムスレウの概念群である。その有効性は単に理論的なものであるだけでなく、徹底して政治的なものでもあることを無視してはならない。ここにドゥルーズにはおそらくできない、ガタリ固有のイェルムスレウ理解がある。こうした理解によってこそ、意味作用(シニフィアン)から世界を逃がす理論と実践の基盤がガタリの思想のなかに創設されたのであって、『機械状無意識』や『千のプラトー』以降においてもさらに練り上げられていくことになるのである。

## 注

- (1) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille plateaux*, Minuit, 1980, pp.57-58. (『千のプラトー』、下巻、宇野邦一ほか訳、河出文庫、二〇一〇年、一〇〇頁。)
- (2) cf., Félix Guattari, "Des deux types de coupures", *Écrits pour l'anti-œdipe*, textes agencés par Stéphane Nadaud, Lignes, 2012. (「ふたつのタイプの切断」、『アンチ・オイディプス草稿』、国分功一郎・千葉雅也訳、みすず書房、二〇一〇年。) ガタリが見出したイェルムスレウとスピノザの共通点についてまとめたものとしては次を参照。山森裕毅、「artificeの哲学と〈雀蜂-蘭〉の機械状生態学——フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』より」、『hyphen』三号、二〇一八年。  
<https://dglaboratory.files.wordpress.com/2018/05/e38090e8ab96e88083e38091e5b1b1e6a3aee8a395e6af85e3808cartificee381aee593b2e5ada6e381a8e38088e99b80e89c82-e898ade38089e381aee6a99fe6a2b01.pdf>  
(最終アクセス日：二〇二三年八月一四日)
- (3) 本稿ではガタリの思想を辿るうえで避けて通ることのできない「スキゾ分析」、「抽象機械」、「脱領土化」、「アジャンスマン」などの独自語の使用を極力控える。正確を期すためには本来であれば欠かせないが、それらの聞き慣れない難解な用語の説明に追われてしまうことで、この短い論稿で伝えたいことを伝えられなくなることを恐れるためである。
- (4) Louis Hjelmslev, *Prolégomènes à une théorie du langage*, traduit du danois par Una Canger, Minuit, 1971, p.64.

(『言語理論の確立をめぐる』、竹内孝次訳、一九八五年、五七頁。なお引用は仏訳を参照しつつ邦訳から行った。)

- (5) Félix Guattari, *Écrits pour l'anti-œdipe*, p.365. (『アンチ・オイディプス草稿』、三四四頁。)
- (6) Félix Guattari, *ibid.*, p.268. (同書、二五六頁。)
- (7) あるいはガタリ思想としては、社会に人を従属させるためにそのような機能を持つものとして言語としての無意識が精神分析によって発明された、と表現したほうが適切かもしれない。
- (8) Félix Guattari, *La révolution moléculaire*, édition de Stéphane Nadaud, Les prairies ordinaires, 2012, p.450. (ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ、『政治と精神分析』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九九四年、九四頁。)
- (9) Félix Guattari, *Écrits pour l'anti-œdipe*, p.365. (『アンチ・オイディプス草稿』、三四四頁。)
- (10) Félix Guattari, *ibid.*, p.365. (同書、三四四頁。) ここで対比されている「無意味」の原語は non sens、「非-意味」は a-sens であり、ガタリの記述から後者は infra-sens とほぼ同義だと考えられる。
- (11) 『アンチ・オイディプス』では、この記号素 = 形象概念にさらにリオタールの形象論が接ぎ木されてシニフィアン批判が開かれる。cf., Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'anti-œdipe*, Minuit, 1973, pp.289-291. (『アンチ・オイディプス』、宇野邦一訳、五六-五九頁。)
- (12) Félix Guattari, *op.cit.*, p.366. (前掲書、三四五頁。)
- (13) 『記号学小辞典』、脇阪豊・川島淳夫・高橋由美子編著、同学社、一九九二年、一六八頁。
- (14) これはガタリがイエラムスレウとスピノザのあいだに見出す共通点のひとつである。またガタリは自身のいう「コード」をイエラムスレウの「形式」、そしてスピノザの「様態」と同一視している。
- (15) cf., Félix Guattari, "Sur cette question du signe de puissance", *Écrits pour l'anti-œdipe*, pp.331-351. (「力能記号に関する質問について」、『アンチ・オイディプス草稿』、三一四-三三二頁。) また、ガタリのコード論および雀蜂と欄の婚姻については注(2)で示した山森論文も参照のこと。
- (16) Félix Guattari, *La révolution moléculaire*, pp.381-382. (『精神と記号』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九九六年、九頁。)
- (17) Félix Guattari, *ibid.*, p.211. (『分子革命』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九八八年、一八四頁。)
- (18) Félix Guattari, *ibid.*, p.212. (同書、一八五頁。)
- (19) Félix Guattari, *ibid.*, p.399. (『精神と記号』、二八頁。)
- (20) Félix Guattari, *ibid.*, p.213. (『分子革命』、一八六頁。)
- (21) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Kafka*, Minuit, 1975, p.85. (『カフカ』、宇野邦一訳、法政大学出版局、二〇一七年、九三頁。)
- (22) イエラムスレウはこれをデンマーク語で mening と呼ぶが、フランス語では sens、英語では purport と訳されるように、素材それ自体に「意味」という意味を持たせている(日本語訳者はこれを意味の原料と捉えて「原意」と訳している)。ガタリは『草稿』のなかでこのことに戸惑いを見せているが、『分子革命』ではこれを「機械状の意味」(sens machinique)と考えるようになる。
- (23) Félix Guattari, *op.cit.*, p.450. (『政治と精神分析』、九四頁。) 記号学(sémiologie)と記号論(sémiotique)の違いを簡略に示すと、前者が言語の規則を基準に記号の機能を探求する学であり、後者が言語を記号の一分野として位置付けて記号の機能を探求する学といえる。前者の代表的な論者がソシュール、後者の代表的な論者がパースとされる。
- (24) Félix Guattari, *ibid.*, p.450 (同書、九五頁。)
- (25) Félix Guattari, *ibid.*, p.389. (『精神と記号』、一七-一八頁。)
- (26) Félix Guattari, *ibid.*, p.449. (『政治と精神分析』、九三頁。)
- (27) ガタリがメッツを参照しながら映画における表現の素材として挙げているものは、音声的な組成、音響的な組成、視覚的で色彩的な組成、色彩のない視覚的な組成、人間の身体の身振り運動などである。cf., Félix Guattari, *ibid.*, p.390. (『精神と記号』、一八頁。)

- (28) Félix Guattari, *ibid.*, p.435. (『精神と記号』、六九頁。) ガタリには記号論 *sémiotique* と記号学 *sémiologie* について明確な使い分けがなされていない時期がある。
- (29) cf., Félix Guattari, *ibid.*, p.437. (『精神と記号』、七〇頁。) 本論のなかに入れ込むことはできなかったが、重要な論点として触れておきたいのが、ガタリが表現に「言表行為の集成的アジャンスマン」、内容に「機械状アジャンスマン」という概念を当てていくことである。ということは、表現と内容の区別の消失とは言表行為のアジャンスマンと機械状アジャンスマンの区別の消失をも意味することになるが、これ自体がガタリ思想のなかでどのような事態を指すものなのか、丁寧に掘り下げていく必要のある主題といえる。